私が幼児教育を志した頃(1)

津守　真

私は青年期に敗戦という日本の社会の大転換期に遭遇し、戦前と戦中と戦後といずれもの時期を体験した。つい最近までは、これは私共の世代の者はだれでもが知っていた共通体験だったが、いまはその時代の人が少なくなった。過去は知らない方がいいこともある。しかしその記憶を失ったら現在が違ってしまうような大事な記憶もある。私はその時に青年期を生きた者としてそれを記しておきたい。私が幼児教育を専門とするに至ったのも、自分の青年期の日本の敗戦の体験と切り離すことはできない。

私は昭和十八年から日記を書いていた。それを手掛かりにして記してみようと思う。

復員の日

昭和二十年八月二十九日、私は一面焼け野原の道を駅から家に向かって歩いていた。途中、夾竹桃の赤い花が

強烈だった。私は毎年夾竹桃の花が咲くとき、昭和二十年のあの日を思い出す。家の勝手口をあけて、「ただいま」と声をかけると、母と妹が飛び出してきた。母は顔をくしゃくしゃにして床に座り込んだ。いまは亡き母の最も印象的な顔である。私は埃にまみれたゲートルをゆっくりとほどきながら、もう二度と兵隊にとられることはないのだと自分に言い聞かせた。

私が召集されたのは、わずか一月半前の七月十四日だった。私は西田幾多郎の『善の研究』を読んでいた。私の肩越しに母が召集令状を机の上においた。「今朝召集の報を受けたから記念に一筆書いておこう。現実の一つ一つが人生の階段である。一歩一歩登って行こう。純粋経験に徹して」と私は日記帳に記して、本を閉じた。一度軍隊に行けば、生きて帰れないというのは、当時の青年はだれもが知っていた。送る人も送られる人も、みんなが悲壮感を負いながら、毎日を何とか明るく生きようとしていた。

昭和二十年—軍隊と敗戦

私は昭和二十年四月に文学部心理学科に入学した。戦争の熾烈な時で、三月九日には東京は大空襲に会い、本所深川、下町一帯が焼かれ、何万という人が死んだ。五月二十五日の大空襲では山の手一帯が焼かれた。低空飛行で焼夷弾をバラバラと落とす米軍の爆撃機の腹を、私は映画でもみるようにすぐ目の上に見ていた。その焼夷弾を消そうと走り回って私も軽い火傷をした。一カ所消しても、次から次へと落ちて来る火の玉には、もはやなすすべもなく焼かれるに任せるよりほかなかった。私共の住居は幸いに焼け残った。

入隊の日、駅のホームの端に立っていつまでも手を振っていた父の姿を私はいまも忘れることができない。私にはいつも背筋を伸ばして励ましてくれた父だったが、このときの父の姿には別れ難い気持ちが滲んでいた。背中の荷物の中には、父がくれた小さな聖書と、万葉集とクルト・レヴィンの心理学の本を入れていて、そのことで入隊早々にひどく殴られた。軍隊は、上官の命令を笠に着て、下士官が自分勝手に振る舞う下等な集団である。自己反省もなく、他人への配慮も尊敬もない。母が買ってくれた、何本も刃の出る上等なナイフがいつのまにか下士官の腰にぶら下がっていた。それを知りながら、私は何も言うことができなかった。崩壊寸前の日本陸軍の実態を私はつぶさに体験していた。兵隊とはいえ、帯剣もなく、食器は空き缶と竹の筒だった。私の部隊は房総半島南端の千倉に送られた。海岸線の砂浜に、人ひとりが入れる「たこつぼ」防空壕を掘り、竹の棒の先に爆薬をつけて上陸する米軍のタンクの下に飛び込むのが私共の任務だった。あるとき大隊長が馬に乗って視察に来て、元気があってよろしいと私はほめられた。こんな状況で、こんなことでいい気分になるのも人間心理の不思議である。竹の先にくくりつけた手榴弾でタンクを爆破できるとは思えなかったし、こちらも爆弾と一緒に死ぬのだが、だれもそのことは質問しなかった。

私共が敗戦を知ったのは八月十八日だった。町にいった兵隊が、米軍のまいたビラを拾って来て、日本は負けたらしいと知らせた。次いで、杉山元帥の率いる第一軍は、奸臣の言に迷わされず徹底抗戦すべしとの軍命令が出た。私共大学生の兵隊は、二・二六事件と同じ反乱軍になるのではないかと本気に逃走を考えた。日本は戦争に負けたから、兵隊は皆奴隷としてどこかにつれてゆかれる、兵たちはまだ家に帰れると思うなと、下士官は私共に言った。次いで占領軍命令で、定められた期日までに日本軍は鴨川以北に撤退しなければ射殺するとのことだった。私共は銃の菊のご紋章を石で摩り消し、部隊の

銃をすべて校庭に積み上げ、油をかけて焼いた。八月二十三日の夕方、私共は部隊の荷物を竹の棒にくくりつけて担ぎ、房総半島を北に向かって行軍を開始した。二晩三日寝ずに歩いた。天津、小湊、勝浦と、沿道には漁師や農民が、大日本帝国陸軍の見収めだと提灯をもって見送ってくれた。袖の下に握り飯をもっていて、将校を見ると隠し、私共兵隊に走り寄ってくれるのである。いま思うと、歴史の貴重な瞬間に立ち会ったのである。大原の民家に数日宿営したが、その間にも、家に帰りたい兵隊が逃走し、汽車の屋根に乗ってトンネルで振り落とされて死んだとか、噂がとびかった。八月二十九日、私は突然汽車に乗せられて家に帰ることになった。いま思えば、私は最も早くに復員したことになる。

昭和二十年秋の日本

召集直前に読んでいた『善の研究』を私は長い間開く気が起こらなかった。再び家にいる不思議さ、その間の世の中の変わりように、唖然として何日も過ごした。蝉が絶え間無く鳴いていた。暑い夏だった。

八月三十一日には、マッカーサー元帥が厚木飛行場に着陸したことが新聞に報じられた。九月二日にはミズリー艦上で降伏調印式が行われた。九月五日の帝国議会開院式の勅語には平和国家という言葉があった。私が小学校に入学以来、何十度も聞き暗唱していた「朕思うに我が皇租皇宗……」とは全く違っていた。先日図書館で当時の新聞を見たところ、「朕は……」ではじまる詔勅は次のように述べられていた。「……平和国家を確立して人類の文化に寄与せんことを翼い、日夜軫念おかず、

此の大業を成就せんと欲せば、冷静沈着、隠忍自重、外は盟約を守り、和親を厚くし……」。どの一語もあの頃しばしば目にした語である。

九月六日には東久邇宮が首相になり、新聞は「万邦共栄、文化日本を再建設」という大見出しを掲げた。半月前までは「大東亜共栄圏、徹底抗戦」という語に満ちていた同じ新聞である。さらに首相談話として「前線も銃後も、軍も官も民も、国民尽く静かに反省する所がなければならない。今こそ総懺悔し……」と掲げた。「前線」とは、大陸や南方への最前線の兵隊、軍人であり、銃後とは、前線の兵隊が安心して戦争できるように、国内にあって家や職場を守る婦女子である。現在ではこんな注をつけないと理解されない語であるが、当時にあっては、この語を使わなければ国民の実態をあらわせなかった。軍、官、民によって人口は構成されていた中で、いまや「軍」は解体されつつあった。軍隊の階級を示す肩章を切り取った軍服姿が町に溢れ、上官に出会ってもはや直立不動敬礼する者もいない、社会の変化は急激だった。「国民総懺悔」というのは、当時の標語だった。八月十五日以来、一カ月も経たないうちに、軍国主義指導者のみでなく、国民全部が日本の犯したあやまちを反省して懺悔せねばならぬと国の指導者が宣言した。戦時中に正論を言ったためにひどい目にあった先輩達がいた。言うべきときに言わなかったことがあるではないかと言われれば、だれもが後ろめたく感じていた。国民総懺悔というなら、そのことだろうと青年は考えた。言うべきときに発言しなければ全体が取り返しのつかない方向に進む。このことは後年になるまで折にふれて私は思い起こした。後に私は米国に留学したときに、国際政治専攻の米国人学生の友人は、日本人は国民総懺悔と言うが、今回の戦争の何をだれが反省し、懺悔するのかと皮肉を込めて批判した。総懺悔というのは、だれも本気に理性をもって反省していないことではないか、時がくると、また全員が逆行するというのが彼の趣旨だった。現

代に思い当たることばである。

九月九日の新聞は、連合軍が極めて平穏のうちに帝都に進駐したことを伝えた。九月十四日の新聞は、第一軍司令官の杉山元帥の自刃、夫人も後を追って自刃されたことを伝えた。私の部隊の最高司令官の自殺である。私の軍隊生活は名実ともに終わった。

社会の大変転の中でも青年は自分が将来に向かって何をなすかを考える。昭和二十年九月九日の私の日記には、「自分は何かをなすことを望んでいる。そして何もできないでいる。望んでいるのは、心理学であり、生理学であるかもしれない。しかし、最初から理想的な学問や理論が存在しているのではないだろう。自分の生活の中から学問を生み出さねばならない」と記した。戦争指導者の自決は、このころ毎日のように報じられた。軍人、政治家のみでなく、その中には、私が読んでいた『生理学』の著者であり、元文部大臣だった橋田邦彦の服毒自決もあった。これらの人々は時代の逆転に遭遇し、壮年期の精神的アイデンティティを保つには、それ以外の道が考えられなかったのだろう。価値の逆転した社会に生きて自分はどうすればよいのか、若い人は皆、迷っていたと思う。

柿の木に夕日があたっていた。蟬の声がじんじんと沁みいるようだった。

新聞は、「誠意溢れる米軍の態度」を報道した。軍隊といえば、上官の命令に服従して人間性を殺す日本軍の実際を常に体験して来た私共にとって、遠慮なく人間性を見せる米国の軍隊は驚きだった。あの当時の人々には、日本の軍隊と連合軍の軍隊とのコントラストは新鮮に映ったことは間違いないだろう。

この頃、友人たちは次々と軍隊から復員して来た。私の亡兄は昭和十七年九月に当時の臨時措置による大学短縮卒業とともに、六本木の近衛歩兵三聯隊（現在の防衛庁）に入隊した。私は兄の背広を風呂敷に包んで持ち帰った。じきにスマトラに行ったが、最後まで将校にならず、兵長のままだった。音信がなくなって久しかったが、母は、玄関の扉があくたびに飛び出していった。その兄は敗戦のときイギリス軍の捕虜になってシンガポールで港の荷役に従事し、二年半後の昭和二十二年半ばに復員した。帰ってきたのは幸いだったが、青年時代の六年間、軍隊にいっていたことになる。私の親しい友人の中には、遂に帰らなかった人が何人もいる。私の父のいとこのKさんは、私の家に寄宿しており、私の隣室で寝起きしていた。私より二年年長で、商業高校に通っており、悩み多き青年だった。私がはじめてフロイトという名前を見たのは彼の本箱だった。その他、式場隆三郎、赤面恐怖症、性と名のつく本が並んでいた。よく私の部屋に来て悩みを語った。兵隊にゆくことを忌み嫌っていた彼にも、昭和十九年に召集令状がきた。縄をつけられて引っ張られるようにして出征した。比島に行ったと聞いたが、遂に帰らなかった。悩み多き多感な彼は、死に際して「海ゆかば」も「君が代」も歌わなかったに違いない。もうひとりの親しい友、旧制高校で同じ文乙の仲間だったMくんは、哲学青年だった。しばしば夜中に彼は寮の私の部屋に訪ねてきて、哲学宗教を語った。兵隊にゆくことを嫌がって泣いていた。彼は母親思いだった。入隊直前に彼が作詞した寮歌の結詞で、彼は、「追憶（おもいで）は尽きず湧きくれ、しのびよる別れのしらべ、継ぎゆかん若き友らに、護りきし伝統（つたえ）の灯（ともし）」とうたった。彼もまた帰って来なかった。シベリアで死んだと聞く。私の同級生は戦死した者は比較的少ないが、私と一、二年違いの上級生たちは、たくさんの人が南方や大陸で戦死した。中には無実の罪を負って、外地で戦犯として処刑された若者もいる。こ

の友らの死は何だったのだろう。畳の上の死ではない。軍隊と戦争の時代の荒波に翻弄されて人生を終わったこの友らのことを、私はいまもしばしば考える。

大学はまだ再開されていなかった。昭和二十年秋、軍隊から解放されながら、青年はそれぞれに悩んでいたと思う。後になって聞いたのだが、法学専攻のある友人は、価値観の転換に悩んだ末、基督教徒となり、ユダヤ教律法の研究者になった。生物学専攻のある先輩は仏教文化の研究者になった。陸士や海兵に行っていた友人たちは一般大学に再入学せねばならなかった。皆それぞれに自分の道を探していた秋だったのだと思う。

＊

この原稿を書いているとき、「君が代」の法制化が国会で決められようとしている。

私の世代にとって、「君が代」は、これらの無念の思いを抱いて戦死した若き友らの記憶と結び付いている。国家にとって国歌があるのは当たり前ではないかと言って強制するのは何かがおかしい。昭和二十年秋だったら、こんなことは起こらなかったろう。軍隊の体験は一様ではなく、軍隊という階級制度の中で尊敬されて良い思いをした人もいる。その人達にとっては、「君が代」は自らの人生の栄光の時期の頌歌なのかもしれない。私は外国に行って国歌が流れると皆が起立して敬意を表するのは礼儀だと思う。しかし日本人の戦争の記憶には複雑なものがある。「君が代」を批判すると、また「非国民」と言われるのではないかという心配をするのは、私の世代の思い過ごしであろうか。